

今回は、津山藩医・宇田川玄真が刊行した江戸時代のベストセラー医学書『医範提綱』について紹介します。

宇田川家を相続した玄真は、玄真が手掛けていた西洋内科や薬学の研究を引き継ぎます。その中で「内科治療をするにも薬の処方をするにも、まずは体内の構造を知らなければならない」と考えるようになりました。西洋の医術は、人体の器官と働きを明らかにし、それによって病気の原因や治療法を探っていたからです。

そこで、人体の構造を研究しようと西洋の名医の本を数冊翻訳し、要点を簡単にまとめて文化2年(1805)に刊行したのが『医範提綱』(3冊)です。

この書は、解剖学だけでなく生理学や病理学も盛り込まれ、仮名交じりの文章で分かりやすく書かれていました。そのため、西洋医学の入門書として重宝され、何度も版を重ねたのです。明治になっても、医学校で教科書に使われたといえます。西洋医学の知識を広めたこの書が医学の発展に果たした役割は大きく、現在も使われている身体器官の名前には、この書で定着したものがいくつもあります。

例えば『解体新書』では「厚腸」「薄腸」と訳されていたものを、この書で初めて「大腸」「小腸」と言い換えました。また、リンパ腺の「腺」や脾臓の「脾」は中国で作られた漢字ではなく、実は玄真が器官の働きを考えて新しく作った文字(国字)なのです。「腺」の字は、今では逆に中国でも使われています。

# 筆漫覧博洋

～玄真と『医範提綱』～

3年後にはさらに付図の「内象銅版図」を刊行しました。これは日本で初めての銅版解剖図といわれ、有名な銅版師・亜欧堂田善の手で西洋医学書の精巧な解剖図が再現されています。この図も大変な評判となりました。

この書の刊行にあたり、津山藩主・松平齊孝は「後進の手本になる書物を作った」と褒め、出版資金を貸しています。玄真は医学書の翻訳・刊行を通して西洋医学を志す人の道を開くという大きな功績を残しているのです。



▲『医範提綱』と「内象銅版図」

※透かしの家紋は右が箕作家、左が宇田川家のもの

## 10月中のひとの動き

人口	109,837人(前月比+43)
男	52,377人(同+26)
女	57,460人(同+17)
世帯	43,887世帯(同+53)
転入	284人
転出	254人
出生	94人
死亡	81人

(11月1日現在)

広報つやまは、環境保護のため再生紙と大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクルにご協力ください



## つぶ・や・き

### 編集室

12月を「師走」というのは、この時期になるとお坊さんがお経をあげるためにあちこちの家々を忙しく走りまわったことからきたそうです。年末が近づくと慌ただしくなる12月。風邪などひかないよう元気に乗り切りましょう!(和)

例年にも増して寒い日々が続いている今日このごろ。寒さが苦手な私は、この時期には毎年引きこもりがちになってしまいます。しかし、取材は外に出ることが基本。冬のすばらしい風景を再発見しています。(S)



慌ただしさの増す師走。今年一年頑張ったあなたの体へのご褒美に、身近な市内の温泉へ行かれてはどうですか。たまった疲れを癒やし、新しい力を与えてくれると思います。今年もご愛読ありがとうございました。(2)



12月号

平成20年  
2008  
650号

編集・発行(毎月10日発行)  
津山市総合企画部市長公室(市役所3階)  
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地  
☎0868-23-2111(代) ☎0868-32-2152  
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp

☆広報つやまはホームページで閲覧できます。  
<http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>

